植民地都市の社会史

1．研究組織

研究代表者：加藤　剛（京都大学東南アジア研究センター・教授）
研究分担者：深見　純生（桃山学院大学文学部・助教授）
泉田　英雄（筑波大学芸術学系・講師）

2．研究のねらい・目的

本研究は、重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」の主要研究項目「地域性の形成論理」に関連する課題として、主として東南アジアの植民地都市を対象として実施するものである。

本研究の狙いは、東南アジアの植民地都市、なかんずくオランダ領東インドのバタビア（現インドネシアのジャカルタ）を対象として、東南アジアの地域性の形成論理に関するモデル構築の可能性を探ろうとするところにある。東南アジアにおける地域性の形成は、東南アジアの内なる世界と外来文明との相互作用のなかで進行した。内世界と外文明が交わる磁場を形成したのは都市である。なかでも、現代東南アジアの地域性をも考察の射程に入れた場合、国民国家形成に先立つ植民地時代の都市の研究が、きわめて重要な位置を占める。

こうした問題関心に導かれて、本研究では、これまであまり顧みられることのなかった東南アジアの植民地都市を研究の中心に据え、東南アジアの地域性の形成論理との関係で、次の三つの研究目的を達成しようとする。

(a) これまで東南アジア研究であまり試みられなかった社会史のアプローチを採用し、そのための新たな資料の発掘と既存資料の新たな利用法を考える。

(b) 植民地都市の事例としてバタビアに焦点を当て、研究組織メンバーの関心に沿って、植民地都市世界を精神世界、権力構造、建築空間という三つの位相に分けて多角的に考察するとともに、植民地都市の全体的なイメージの構築を目指す。

(c) バタビアという個別事例を手懸かりとしながら、植民地都市を磁場として進行し、現代東南アジアにつながるような地域性の形成論理の具体像を明らかにする。

以上の目的のために、平成５年度から６年度までの２年度の計画を立て、第一年度は主として資料収集に力を注ぎ、第二年度には研究組織メンバー各自による研究課題（後述）の追及に専念する。両年度ともにおいて、研究会を積極的に開催する。

本研究の特色は以下の３点に集約される。

第一は、研究組織を構成するメンバーがいずれも東南アジア社会および都市での豊富な調査

経験を持つことと、メンバーの構成が、社会学、歴史学、建築学と、社会科学、人文科学、自然科学にまたがるきわめて学際的な構成をもつことである。三つの異る分野の研究者が、東南アジアの植民地都市、なかんずくバタビアという比較的限定された共通の「場」を分かち合い、この「場」での密度の濃い知的交配をとおして東南アジアの地域性の形成論理にアプローチする、これが本研究の第一の特色である。

第二の特色は、東南アジア研究においてこれまで比較的等閑視されてきた植民地都市を研究の中心に据え、内世界と外文明の交わる磁場としての都市の考察をとおして、地域性の形成論理を考えようとするところにある。ややもすると、東南アジアの地域性は、農村部における“伝統的な”慣行やしきたり、人間関係と同等に考えられがちである。しかし、本研究は、都市こそが地域性の形成の中心部分に位置するものであるとの立場に立つ。

これまでの東南アジアの都市研究は、そのほとんどが現代都市、それも都市問題の研究が中心であった。その結果が示すところは、東南アジアの地域性ではなく、「発展途上地域」としての地域性であり、固有性である。本研究では、国民国家から形成される現代東南アジアの歴史過程に多大の影響を与えた植民地都市にまで研究の視野を引き戻し、植民地都市を文学、都市行政機構、建築という異る位相から照射するとともに、植民地都市をより包括的に理解しようとするものである。

第三に、地域性の形成論理は時間の記録であると理解し、歴史的なアプローチを強調する。それも伝統的な歴史学の方法論に因われることなく、現在「社会史」と総称されるところの、人間の生活世界により密着可能な歴史的アプローチを強調する。したがって利用される資料も、従来の植民地文書に加えて、小説、都市行政法、地図、写真と様々である。こうした社会史的取り組みは、東南アジア研究、それも東南アジアの都市研究においてもっとも遅れている分野であるばかりでなく、社会史的アプローチこそが、課題の「地域性の形成論理」を考えるうえで、もっとも有効な歴史的アプローチであると信ずる。

研究組織の全メンバーは、すでに東南アジア社会および都市を対象とした多くの調査に従事しており、いずれも地域研究におけるエキスパートである。

研究代表者の加藤は、これまで京都大学東南アジア研究センターを中心に数次にわたって行われてきた科学研究費補助金による調査に参加している。このうち、東南アジアにおける人の移動、東南アジアの都市に関する調査としては、「熱帯島嶼における人の移動に関わる環境形成過程」、「東南アジア型都市文明の形成」、「東南アジア海域世界の動態に関する総合的研究」などがある。平成４年度からは、「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的

研究」（代表者：加藤剛）の課題のもとに、３カ年の計画でフロンティア空間としての都市を考察に入れた島嶼部東南アジアの動態的研究を推進中である。

本研究は、こうした海外学術調査の成果を踏まえて準備され、現在進行中の課題とも密接に連携して行われるが、それとともに、他大学の東南アジア研究者との共同研究を意識的に意図しながら計画されたものである。知識と経験の知的交配は、領域研究の「総合的地域研究の手法確立」のために必要不可欠だと考えるからである。

研究分担者の深見は、東南アジアの都市に関する深い歴史的パースペクティブを有している。京都大学東南アジア研究センターを中心に行われた科学研究費研究助成プロジェクトの総合研究(A)「中国資料に基づく東南アジア国家成立に関する総合研究」（昭和57年度）および海外学術研究「熱帯島嶼における人の移動に関わる環境形成過程」（昭和59年度）にも参加し、東南アジアの都市についての洞察を深めてきた。深見の研究成果は、島嶼部東南アジアの港市国家シュリーヴィジャヤ、イスラム同盟に代表される民族運動と植民地都市などについての学術論文として公表されている。近年では、植民地支配の性格をより本質的に理解するために、都市行政を含む植民地行政機構そのものに関心を広げており、その最新の成果が論文「ジャワ島地方行政区画」(1991)である。

もう一人の研究分担者の泉田は建築学を専攻し、一貫してアジアの植民地都市の建築様式の研究に従事してきた。科学研究費補助金一般研究(C)「アジアのコロニアル建築に関する研究」（平成２年度、３年度）や「東洋建築史学史の研究」（平成４年度～６年度）においてアジアの植民地建築様式に関する理論的理解を深めるとともに、平成４年度三菱財団研究助成「遺構に基づくバタヴィア都市形成史に関する研究」などをとおして、フィールド調査に基づく植民地都市研究にも積極的に取り組んでいる。これらの研究プロジェクトの代表者が総て泉田であることからもわかるとおり、若手建築学者のなかで、今もっとも精力的に東南アジアの建築様式の研究を推進している研究者である。

以上のような東南アジアの都市に関する多くの調査が、本研究の実施基盤となっている。

３．平成６年度の研究経過

上記の目的を達成するため、平成６年度は、研究組織メンバーが各自の研究課題の追及に専念するとともに、前年度に引き続いて研究会を積極的に開催するよう努力した。研究会は、年度をつうじて四回開催することができた。それぞれの総合タイトルは、「都市の諸相：メキシコ市・ジョホールバル・香港・バンコク」「フィリピン都市の意味空間」「祝祭空間としての

都市 I」「祝祭空間としての都市 II」で、毎回二人から四人までの話題提供者を招き、泊り込みで行った。研究会には、研究組織のメンバーだけではなく、外部からの話題提供者や出席者を募るよう努力し、この点では、小さなグループながら充実した研究会をもつことができた。

これらの研究会の内容は、概略次のようである。

(1) 「都市の諸相：メキシコ市・ジョホールバル・香港・バンコク」

日　時：平成6年6月24日～26日

場　所：静岡市

話題提供者とトッピクは以下のとおり。

横山和加子（慶応義塾大）「メキシコにおけるスペイン植民地都市建設と都市住民」

宇高雄志（京都大学院）「ジョホールバルの民族混住」

木下　光（東京大学院）「香港の都市住民と市場」

宗田好史（京都府立大学）「バンコクにおける都市住宅の形成と特徴」

植民地都市バタビアに研究の照準を合わせながらも、東南アジア外の植民地都市、さらには東南アジア内の非植民地都市にも、比較のための関心を広げるために企画されたものである。主として建築関係、都市計画関係の専門家を話題提供者として迎えた。

(2) 「フィリピン都市の意味空間」

日　時：平成6年9月12日

場　所：京都大学東南アジア研究センター

話題提供者とトッピクは以下のとおり。

梶原景昭（大阪大学）「黄金伝説のゆくえ」

片山　裕（神戸大学）「フィリピン美人コンテスト論」

都市をたんに物理的空間として規定するのではなく、意味空間としても把握し、この視点からフィリピン都市を考察しようと企画された。具体的には、「山下財宝」をめぐる言説、美人コンテストという現象を話題とした。

(3) 「祝祭空間としての都市 I」

日　時：平成6年12月26日～28日

場　所：京都大学東南アジア研究センター

話題提供者とトッピクは以下のとおり。

横山和加子（慶応義塾大）「ヌエバ・エスパーニャ副王の宮廷とバロック文化」

エンリケ・セルバンテス・サンチェス（メキシコ国立公文書館）「視覚資料でみる旧スペイン植民地都市メキシコ」

冨沢寿勇（静岡県立大学）「マレー祝祭空間の変容——儀礼と遊戯をとおして」

高谷紀夫（広島大学）「祭祀空間としてのラングーン」

二回目の研究会と同じく、都市を意味空間、なかんずく祝祭空間として位置付け、19世紀および20世紀初頭における植民地都市の文化状況を探るために企画された。話題提供者は、インドネシアの外の地域の専門家から選んだ。

(4) 「祝祭空間としての都市 II」

日　時：平成7年3月27日

場　所：京都大学東南アジア研究センター

話題提供者とトッピクは以下のとおり。

青山　享（鹿児島大学）「ナーガラクルターガマにみられる恒例儀礼について」

宮崎恒二（東京外大）「儀礼の諸相：ジャワのグレベッグ」

前回の研究会に続いて都市を祝祭空間と規定し、インドネシアの都市における祝祭が、植民地期以前と植民地期とではどのように変化したのかを考察するために企画された。このために、ジャワのジョクジャカルタを例にして、話題提供者に発表を願った。

上記研究会以外に、泉田が、東南アジア都市との比較の視点を得るために、研究協力者のヨハネス・ウィドドと沖縄に出張した。

総じて、今年度も、満足のいく研究活動を遂行することができた。

4．研究の成果とフロンティア

これに関連した事項は、すでに前項で述べているので、ここでは多くを述べない。二年計画の最終年度にあたる今年度は、研究会開催以外は、研究組織メンバーが各々の研究テーマに専念することを目標としたが、全体的にその目標を達成することができた。

5．今後の課題

平成6年度の研究計画の終了を受けて、平成7年度には、研究報告書のまとめ・刊行を実現する予定である。研究組織メンバー3人に研究協力者のヨハネス・ウィドドを加え、計5章立ての報告書を計画している。タイトルは「植民地都市の社会史：オランダ領東インドの事例」で、

章立ては以下のとおりである。

1．加藤「植民地都市間関係の構図――東南アジアの事例から――」
2．泉田「植民地都市の居住空間――商館からプランテーション・ハウスまで――」
3．Johannes "The Life of the First and Second Generation of a Chinese Immigrant Family in Central Java"
4．深見「東インド党――ユーラシアン都市知識人の希望と挫折の軌跡――」
5．加藤「文学の映すバタビア――『シティ・ヌルバヤ：実らぬ恋い』を手がかりとして――」

6．研究業績（平成6年度発表分）

加藤　剛

"Changing Marriage Patterns in Malay Society of Negeri Sembilan" in *Local Societies in Malaysia Vol.2*, edited by Mizushima Tsukasa. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 39-82, 1994.

"The Emergence of Abandoned Paddy Fields in Negeri Sembilan, Malaysia" *Southeast Asian Studies*, 32(2):145-172, 1994.

「民族と言語」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいマレーシア　第2版』弘文堂，pp. 71-118, 1994.

深見純生

「シュリーヴィジャヤ帝国」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社，pp. 47-69, 1994.

泉田英雄

「チャイナタウンと華人街」『すまいろん』春号，pp. 38-45, 1994.

「東南アジアの都市居住と華人街」『建築文化』10月号，pp. 7, 8-81, 1994.